

M.ジャレル:アソナンス IVb

ミカエル・ジャレルはスイスの現代音楽作曲家。本曲は 2009 年にホルンのために書かれ、2011 年に初演された 10 分ほどの曲。ジャレルはこの「アソナンス」シリーズに 1983 年から取り組んでおり、つねに新しい要素を用いて拡張している。同じように様々な楽器や編成によるシリーズとしては、ベリオの《セクエンツァ》が思い浮かぶが、ベリオが楽器の表現の可能性を最大限に追求しているのに対し、ジャレルは楽器の特定の性質を明らかにすることで、その色彩を輝かせようとする。超絶技巧だけでなく、楽器の並外れた熟練度を要求される本曲では、比類ないホルンの表現力と色彩の豊かさが感じられるだろう。

ブルーーズ:カミングスは詩人である

タイトルがドイツ語なのは、新曲の曲名に関する問い合わせに対し、ブルーーズが慣れないドイツ語で「まだカミングスという詩人のテキストを用いることしか決まっていなかった」と返答したところ、先方が勘違いしてこのタイトルに決まったというエピソードがある。ヘミングウェイやフィッツジェラルドらと同じく 1920 年代の「失われた世代」の一人、アメリカの詩人 E.E.カミングスの詩を用いた作品だが、ブルーーズは 1952 年のニューヨーク滞在時、ジョン・ケージの薦めで初めてこの詩人の作品に接した。1970 年、まず合唱と小オーケストラのための作品として作曲され、1986 年に改訂されて、16 人の混声によるソリストとオーケストラのための 13 分ほどの作品となった。「詩的内容」だけでなく、単語の構成やレイアウト感覚、言わば詩の視覚的側面をも音楽に置き換えるために、歌唱から朗読まで幅広い発声技法を駆使し、あるいは母音あるいは子音を強調して、言葉による空間化を追求している。

M.ジャレル:常に最後の言葉を持つのは天のようだ

EIC は 2025 年のブルーーズ生誕 100 年に際し、作曲家ミカエル・ジャレルに新作を委嘱した。ブルーーズへのオマージュとして、タイトルは、ブルーーズに薦められて知ったフランスのアフォリズム詩人ルネ・シャールの『ダンテル・ド・モンミライユ』(1960)から採られている。古代インドの聖典『リグ・ヴェーダ』の断片を音楽にのせたこの作品は、16 人の混声合唱と管弦楽アンサンブルのための 20 分ほどの曲。本曲はさらにペーテル・エトヴェシュとジョナサン・ハーヴェイという 2 人の作曲家にも捧げられている。『リグ・ヴェーダ』の使用は、ジョナサン・ハーヴェイ《バクティ》の影響を受けているが、ジャレルは原語のサンスクリットを用いている。

ブルーーズ:シュル・アンシーズ

1994 年に初演されたピアノ小品《アンシーズ》が現代的な変容を遂げ、3 台のピアノ、3 台のハープ、3 つの打楽器のための作品として 1996～98 年に作曲された。20 世紀音楽の進路に多大な貢献を果たしたパウル・ザッハーの 90 歳の誕生日を祝って書かれたもので、彼に捧げられた 40 分弱の作品。途切れることなくつながった 2 つのセクションからなり、3 台のピアノを核として、その有機的な外殻をハープと打楽器が多彩な音で拡張する。共鳴楽器の三重奏という特異な楽器編成により、音が空間に無限に散らばり、様々な組み合わせりながら色彩を融合し、明暗織り交ぜた音色に彩られた音の洪水となって降りそそぐ。